

作業所学会の結びつき

所属 社会福祉法人復泉会 氏名 中野卓也

今回で四回目の開催となった作業所学会でしたが、回数を重ねるとに連合会らしい研修会になったのではないかと感じています。

午前中の記念講演は、神戸大学大学院 人間発達環境学研究所 稲原美苗准教授をお迎えして、『当事者学から考える障害者支援』をテーマとして、ご講演いただきました。当事者学とはどのような学問なのか？稲原先生のメッセージを引用すると「当事者学とは、当事者一人一人の経験を探求することを目的としている学問であり、福祉・医療・教育領域の専門家と当事者をつなげる新しい学問領域」とのことです。稲原先生自身が障がいを持つ当事者であり、先生自身の経験を今回の記念講演の中で、たくさん語っていただきました。よく支援の中で利用者視点に立って支援するなど、利用者本位の支援について、語られることが多いですが、稲原先生の講演を聞いていると利用者本位の支援が、まだまだ出来ていないことを痛感しました。制度的な不備もあるし、支援者側の無理解や配慮が至らないことなど、多くのことを気づかせていただきました。

当事者と支援者の間の信頼構築はどのようにすれば築くことができるのか。それはやはりコミュニケーションを深めることではないかと講演を中から感じました。稲原先生の言葉の中に「お互い腑に落ちるところはどこかを探る。」と話されていたところがありませんでした。私の中でこの言葉がとても印象的であり、まさに腑に落ちる言葉でした。「お互いに腑におちるところ」を探るために、たくさんコミュニケーションをとり、お互いの関係性を深めていく。この過程の先に当事者と支援者の間の信頼関係が築けるのではないかと思います。それは、決して制度の中だけでは解決できないことであ

り、作業所学会の研究テーマとして大切にしてきたことであると思います。参加された多くの方が、感じていただいたのではないかと思います。貴重な講演をしていただいた稲原先生に感謝申し上げます。

午後は、各部会の分科会及び全体ディスカッションが行われました。本人部会は、ご本人に対してインタビュー形式で撮影したものを当日、動画で流すなど、内容の工夫がされていました。就労部会では、支援者自身の葛藤が大事であるとの報告がありました。葛藤することにより、思考が生まれ行動に移すことで経験が積み重なっていく。とても大事なことであり、その積み重ねが支援者としての技量を高めていくことであると感じました。地域支援部会では、制度の中だけでは支援が困難なケースがあり、現場の努力と地域の連携が利用者さんを支えていく上で重要であることを報告されました。

全体ディスカッションでは、分科会の報告及び会場からの意見や質問等を交えながら、其々の実践の振り返り、今後の支援等に必要なことなどを話し合いました。昨今の人材不足、コロナ禍の中の苦労等がありながらも、日々の支援に対して真摯に取り組み、前を向いていこうとする姿勢を感じられ、とても活発な分科会及び全体ディスカッションであったと思います。

最後に新型コロナウイルス流行が中々治まりを見せない中で、今回の作業所学会もオンライン形式で開催いたしました。本来であれば対面形式の開催と考えると、現状では難しい状況でした。そのような中で、参加者の皆様へ少しでも作業所学会の良さを伝えることができるよう、講演して下さった稲原先生、分科会を担当して下さった委員や発表者の皆様、全体ディスカッションをコーディネートして下さった安間委員長、総評して下さった増田先生、今回の研修会の準備から当日の運営をして下さった事務局の皆様にご感謝と御礼の言葉を述べさせていただきます。来年以降も作業所学会は開催していくと思っておりますが、活発であり深みのある会になっていくことを期待しています。